



TITLE:

<映画に見るマレーシア> サバの地 元映画に見る民族・宗教と国籍

AUTHOR(S):

山本, 博之

CITATION:

山本, 博之. <映画に見るマレーシア> サバの地元映画に見る民族・宗教と国籍. 日本マレーシア研究会会報 2009, 42: 30-36

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228915>

RIGHT:

発行元の許可を得て登録しています.

【映画に見るマレーシア】サバの地元映画に見る民族・宗教と国籍(山本博之)

サバの地元映画に見る民族・宗教と国籍

山本博之

サバ州とサラワク州は半島部マレーシアの諸州と大きく異なる独自の地元文化を有している。特に目立つ違いは「民族」の扱われ方だろう。政治経済から文化まで社会生活のほとんどすべての側面に民族性が影響を与える半島部と異なり、サバでは民族・宗教や国籍の違いは社会生活においてあまり大きな意味を持っていない。1991年のUMNOのサバ進出や1994年のBNによる州政権奪取を契機に半島部をまねて民族や宗教の違いに意味が与えられる場面も増えてはいるが、いずれも決定的な要素にはなっていない。このようなサバと半島部の違いをよく示しているのがテレムービーだ。ビデオCDとして販売される映画で、サバでは2002年ごろから地元制作のテレムービーが大流行している。

サバにおけるテレムービーの大流行のきっかけを作ったのは、サバが生んだ天才喜劇俳優のアブバカル・エラとその相棒マット・コンゴによる黄金コンビが出演する一連の作品である。特に「オラン・キタ」(Orang Kita)と「不法恋愛」(PTI: Percintaan Tanpa Izin)の人气が高く、それぞれ続編が作られている。アブバカル・エラは出演するだけでなく監督も務め、P.ラムリーの再来とも言われている。数あるアブバカル・エラ作品の中でもマット・コンゴとコンビで出演しているものの人气が高いため、ここではアブバカル・エラとマット・コンゴが共演するテレムービーを中心に紹介したい。

〈陸の民〉と〈海の民〉

サバでテレムービーが人気を博した背景とし

て、マレー人しか登場しない半島部のマレー映画と異なり、サバの地元テレムービーには民族や国籍が違う人々がともに暮らすサバ社会のあり方がよく描かれていることがある。

内陸部のムルト人をまねた髪型が特徴的なアブバカル・エラは、サバの〈陸の民〉だ。伝統的に内陸部に住み、稲作や狩猟採集を行ってきた人々で、多くは精霊信仰だが、一部地域ではキリスト教やイスラム教が受け入れられている。かつてブルネイ・マレー人から「ドゥスン人」や「ムルト人」などの名前と呼ばれ、イギリス人によってこれらの呼び名が受け継がれた。1950年代に彼らの一部が「カダザン人」を名乗り、ドゥスン人とムルト人はカダザン人と呼ばれることになった。しかし、自分はカダザン人ではなくドゥスン人だと主張する人もいるため、1980年代末には「カダザンドゥスン人」と呼ぶこととされた。ムルト人がこれに含まれるかはいまだ決着がついていないため、人によっては「カダザンドゥスン・ムルト人」、あるいは頭文字をとって「KDM コミュニティ」などと呼ぶ。本稿ではこれらの人々を〈陸の民〉と呼び、必要があれば「カダザンドゥスン系」と呼ぶ。

マット・コンゴはサバの〈海の民〉だ。伝統的に沿岸部に住んで漁労や交易を行い、イスラム教を信仰している。19世紀末に国境線が引かれてサバが近隣諸国と切り離されると、ブルネイ王国やスルー王国の臣民たちは、ブルネイとサバ、スルーとサバというように複数の国にまたがって暮らすことになった。そのため、自身はサバ生まれでサバの市民権を持っていたとし

JAMS News No.42 (2009.3)

ても、外国に家族や親戚がいると見られるため、〈陸の民〉から外来移民と見られ、そのような扱いを受けることもある。また、20世紀に入って東南アジアの国々が独立を迎えると、〈陸の民〉から見て〈海の民〉と似た特徴の人々がインドネシアやフィリピンからサバを訪れ、しかもその多くが入境や滞在の正式な許可を持たずにサバに滞在していることから、〈海の民〉と「不法滞在者」が同義に見られることも少なくない。以前はこのような不法滞在者を *pelarian* (難民) などと呼んでいたが、最近では政治的に正しい表現として *pendatang tanpa izin* (無許可の訪問者) の頭文字を取った *PTI* と呼んだりする。いずれにしろ、伝統的に沿岸部に住み、ほとんどがイスラム教徒で、サバ以外の地域とのつながりを維持して暮らしており、サバの市民権を取って〈陸の民〉と同じように暮らしている人もいるが、「故郷」との関係に応じて国民扱いされたり不法滞在者扱いされたりするのが〈海の民〉だということになる。

サバでは、〈陸の民〉と〈海の民〉はしばしば互いに対立する存在として語られる。しかし、古くは市場での交易から新しくは独立後の政党結成まで、〈陸の民〉と〈海の民〉は常に協力を意識し、互いを必要としてきた。サバが置かれた政治状況によっては〈陸の民〉と〈海の民〉の力のバランスが一時的に崩れ、両者の対立が強調されることもないわけではないが、それでもなおサバの〈陸の民〉と〈海の民〉は決して相互に排他的な社会を作っているわけではない。

〈陸の民〉と〈海の民〉の説明からも明らかのように、〈陸の民〉と〈海の民〉という分け方は先住民と移民という分け方にほぼ対応している。〈陸の民〉がサバの先住民であり、近隣地域

から沿岸部にやってきた移民やその子孫が〈海の民〉だとする理解である。これに従うならば、〈陸の民〉はサバ社会における主人であり、〈海の民〉は客人ということになる。〈海の民〉にはこの考え方に批判的な人も少なくないが、批判を含めて、そのような考え方があることはサバで広く受け入れられている。

ところが「オラン・キタ」では、主人であるはずの〈陸の民〉が客人であるはずの〈海の民〉に導かれて都会に出て、〈海の民〉にいろいろ助けられながら都会で暮らしていく様子が描かれている。自動車が往来する道を渡れなかったりエスカレーターを怖がったり自動販売機に話しかけたりするのは山奥の田舎に住んでいた人が都会に出てきたという冗談で済ませられるとしても、〈陸の民〉アブバカル・エラ扮するアンパルがはじめてキナバル山を見たとき、〈海の民〉マット・コンゴ扮するオムに「外国の観光客に笑われるからサバ人だったらキナバル山のことがうまいと知っておかなくちゃだめだろ」と窘められている姿は、ところ変われば「お前のような外国人に言われたくない」と怒りそうなものだ。〈陸の民〉が〈海の民〉に窘められている映画を作り、それをサバの人たちがおもしろがって観るだけでなく、「オラン・キタ」(私たち)というタイトルまでつけてしまうところに、半島部のような民族別の社会を作ったことがなかったサバ社会の様子が実によく表れている。

「オラン・キタ」の姉妹版にあたる「不法恋愛」は、アブバカル・エラ扮するアンコンの娘クラリスとマット・コンゴ扮するオトックの甥デンが恋に落ちる〈陸の民〉と〈海の民〉の恋愛物語である。オトックはサバ滞在が長く市民権を得ているが、甥のデンは不法滞在者であり、

【映画に見るマレーシア】サバの地元映画に見る民族・宗教と国籍(山本博之)

警察の不法滞在者取り締まりが及ぶ前に国に帰っていく。2008年に制作された続編「不法恋愛2」では、デンが正規の方法でサバに入境し、クラリスと再会するらしい。これがもし半島部であれば、異なる宗教間の恋愛や結婚は家族や親戚じゅうを巻き込んだ大騒ぎになるところだ。しかし、サバでは民族や宗教はもちろんのこと、国籍を持っているかどうかさえ問題にならない。合法的に入境・滞在していなければ権利を制限するが、適切な手続きに従って入境・滞在していれば民族・宗教や国籍の違いによらず仲間として暖かく受け入れるというサバの様子がよく表れている。映画のタイトルである「PTI: percintaan tanpa izin」(無許可の恋愛)は、もちろん *pendatang tanpa izin* (無許可の滞在者) を振ったものである。

宗教間関係と民族間関係

「オラン・キタ」とその続編、そして「不法恋愛」の3つの映画のそれぞれについて、民族や宗教の違いが社会的に重要ではない様子を確認しておきたい。

「オラン・キタ」は、山奥の村からほとんど離れたことがないアンパルがオムに出会い、オムに都会に連れて行ってもらう物語である。明示されないが、アンパルとオムは異なる宗教を信仰している。山奥から都会に出る道中でアンパルが空腹を訴えてもオムが露店で煎餅しか買わないのは、異教徒の土地でオムが安心して食べられるものがないためだろう。2人は都会に着くとイスラム系の食堂で買った鶏飯を食べる。

アンパルには田舎にスリマという幼なじみの恋人がいる。スリマとその父親の宗教が何であるかははっきりしない。2人ともマレー人のよ

うな服装をしているが、サバでは非イスラム教徒がマレー人の服装を身につけることは珍しくない。映画の冒頭では、スリマの父親はかつて呪術を使って悪事を働いていたが、bertaubat (懺悔する=改宗する) と娘に伝え、次に登場したときには頭に白いムスリムの帽子をかぶり、スラウの話をしている。イスラム教徒なのか、それともイスラム教の影響を受けているだけなのかは明確に描かれない。また、アンパルとスリマの結婚が認められたということは、アンパルもイスラム教徒になることを意味しているが、宗教の違いが話題になることなく物語が進んでいく。このように、「オラン・キタ」では登場人物の民族性や宗教が明示されないし、物語も民族や宗教に沿って展開されるわけではない。

続編の「オラン・キタ 2」は、コタキナバルからサンダカンに行くバスで寝過してタウウまで行ってしまったアンパルとオムが東海岸の町を旅する物語である。ある町を訪れると、オムが人違いのために地元の警察に逮捕され、連行されてしまう。しかしアンパルはオムの無実を信じて待ち続け、無実が明らかになって釈放されたオムと再会を果たす。ここでは〈陸の民〉アンパルと〈海の民〉オムの信頼と友情が描かれている。

「不法恋愛」では、アブバカル・エラとマツト・コンゴはそれぞれアンパルとオムと異なる役を演じているが、〈陸の民〉と〈海の民〉であることに変わりはない。アブバカル・エラ扮するアンコンは、かつて親しくしていたムスリムの友人と、宗教は違っても友情は変わらないという誓いを立て、その証しとしてお互いの子を結婚させる約束をしていた。後に友人は亡くなったが約束は生きており、アンコンは娘のクラ

JAMS News No.42 (2009.3)

リスを友人の息子ロディと結婚させようとする。しかしロディには結婚の約束をした相手が別にいた。他方、クラリスは市場で魚を売るオトック（マット・コンゴ）の甥であるデンに惹かれてしまう。しかし、デンは正規の手続きなしにサバに入境し滞在している PTI だった。

「不法恋愛」でも、宗教や民族の違いは恋愛や結婚において重要な意味を与えられていない。ロディもデンもイスラム教徒であり、おそらくクラリスはイスラム教徒でない。しかし、恋愛関係にある男女の宗教が異なることは、家族を含む他の誰からも問題にされない。さらに言えば、クラリスはカダザンドゥスン系の伝統的な衣装を身につけているためにイスラム教徒でない可能性が高いが、そのこと自体は明確に描かれない。服装や住環境などの見かけで宗教を見分けようとするのがほとんど意味を持たないサバ社会の様子をよく表している。

マレーシアの映画では、民族や宗教を超えた恋愛や結婚は「アナック・サラワク（邦題：サラワクの息子）」（Anak Sarawak）や「スピニング・ガシン」（Spinning Gasing）」、最近では「細い目」（Sepet）などで扱われてきた。ただし、これらの映画では、男女の宗教の違いが問題にされ、非ムスリムがイスラム教に改宗して結婚するか、改宗せずに別れるかのいずれかの結末にしかっていない。マレーシアではそれ以外の形で宗教や民族の違いを超えた結婚が考えられないためだ。これに対し、サバのアブバカル・エラ作品は、このような問題をいとも簡単に乗り越えてしまっている。

国家と境界

「オラン・キタ」で、アンパルは州都コタキ

ナバルに出で、そこで出会った物質文明に驚くのがコメディの大部分を占めていた。そうであれば、続編では首都のクアラランプールに行き、近代的な施設に驚き、さらにその続編でシンガポールやニューヨークに行くという発想が出てきてもおかしくない。しかし、アブバカル・エラは「オラン・キタ」に続く作品で大都市を訪ねる旅に出ず、むしろ逆の方向に向かった。

「オラン・キタ 2」ではサンダカンに向かい、「不法恋愛」はサバ北部のクダットを舞台にしている。これは、植民地国家としてのサバ（北ボルネオ）の首都が、クダット（1881-1883）からサンダカン（1883-1946）、そしてジェッセルトン（1946-、1967 年にコタキナバルに改称）へと移ったのを逆に辿っていることになる。

サバの首都の変遷を辿ることは、領域国家が存在していなかったサバに 19 世紀末にイギリス人が入植し、拠点を増やして植民地を形成していく過程を辿ることであり、サバが領域国家として形成されていく過程を辿ることである。

これを逆に辿ることは、州都からフロンティアに向かうということであり、国境や州境といったサバが外部社会と接する境界がどんどんあいまいになっていくということである。実際に、「オラン・キタ 2」では東海岸でオムが身分証明証の偽造犯に間違われるし、「不法恋愛」ではクダット沖のバンギ島で教職に就いたクラリスがおよそマレーシア人らしからぬ外貌の生徒たちに教えることになる。しかし、そこで取り上げられているのはマレーシアの国家制度（国民としての身分証明証の偽造）とマレーシアの国民教育（クラリスが教える教室の黒板に書かれている文字は「1957 年 8 月 31 日独立」）であり、サバの周縁部においてもマレーシア国家の

【映画に見るマレーシア】サバの地元映画に見る民族・宗教と国籍(山本博之)

諸制度が強く意識されていることがうかがえる。

「オラン・キタ 2 で」オムが誤認逮捕から釈放された理由は、真犯人が一足早く逮捕されていたことによる。身分証明証の偽造シンジケートの一味だった真犯人とオムが一人二役であることが示しているように、この地ではオムと同じ文化的属性を持つ人たちがこの種の犯罪に手を染めていても不思議ではないと見られているという現実がある。

民族や宗教の違いは重要でないが、国籍があるかないかは重要だというサバの現実を映し出している。「オラン・キタ」でアンパルがオムと親しくなって最初に尋ねたのが「国籍はとったのか」だったことが示しているように、国籍があるかないかで享受できる権利が異なっている。

もっとも、同国人と外国人の区別を明確にしていることは、同国人と外国人との間に乗り越えられない壁を作っていることを意味しない。むしろ、正規の手続きを踏めば容易に仲間として受け入れられる存在として描かれている。国民と外国人という区別はするが、何世代もサバで暮らしていれば国民と同じ待遇が得られる。これに対し、比較的最近やってきた場合は、フィリピン人やインドネシア人などと呼ばれて外国人扱いされる。「不法恋愛」のオトックとデンのように、血縁関係があっても国民と外国人に分かれることも珍しくない。

サバの周縁部でもしっかり機能しているマレーシアの国家制度を作ったのは首都クアラルンプールである。ただし、クアラルンプールの思惑とは別に、サバの周縁部では諸制度が作る境界を人やモノが自由に行き来しているし、ときには感情も行き来している。制度に反した不法滞在者に対しては断固たる態度で臨むが、制度

に従って再アプローチしてくれば受け入れるということである。

アブバカル・エラと〈陸の民〉のアイデンティティ

サバでこのような映画が作られて大ヒットとなったことの意味を、ここで紹介した 3 作品の主演であり監督も務めるアブバカル・エラに焦点を当てて考えてみたい。

サバの〈陸の民〉と〈海の民〉は、互いに相手を参照しながら自らのアイデンティティを形成してきた。〈陸の民〉にとって自分たちは誰かという問いは、〈海の民〉とどのような関係を築くかという問いと密接に関係している。

〈陸の民〉は、伝統的にサバ各地に広がって暮らしており、集合的なアイデンティティを共有していたわけではない。ブルネイ王国のムスリムは彼らをドゥスン人と呼び、19 世紀末以降にサバの統治者となったイギリス人もそれに倣ってドゥスン人と呼んだ。イギリスの統治領域の拡大に伴って加わった内陸部の住民はムルト人と呼ばれた。こうしてドゥスン人とムルト人にまとめられた〈陸の民〉のあいだで、脱植民地化の過程で自分たちの民族アイデンティティを作り直そうとする動きが登場した。

(1)1950 年代のカダザン・ナショナリズム

第一の波は 1950 年代に西海岸沿岸部のプナンパン地方で生じた。プナンパンはブルネイ王国に近く、人々はブルネイ王国による支配を身近に感じており、それを象徴するのがドゥスン人という呼び名だった。プナンパンには 1880 年代からキリスト教の宣教師が入り、人々の多くがキリスト教と英語に親しんでいた。彼らは

JAMS News No.42 (2009.3)

1953年にカダザン人会を結成し、ドゥスン人ではなくカダザン人であると名乗りを上げた。

1950年代はナショナリズムの時代だった。ナショナリズムの時代においては、植民地からの解放は民族的主体の形成と結び付けて理解される。サバはイギリスからの独立がマレー人ムスリムを中心とするマラヤとの連邦形成という形を取り、しかもその運動の担い手となったプナンパン出身者たちがキリスト教と英語教育の影響を受け、ブルネイ王国による支配を身近に感じていたため、民族的主体の形成にはイスラム教やマレー語と対抗する方向性が与えられた。そのため、〈陸の民〉のあいだでキリスト教や英語教育が必ずしも十分に普及していなかったにもかかわらず、プナンパン出身者が唱える「カダザン人」はキリスト教や英語と結びついてイメージされ、イスラム教とマレー語に対抗するものと見られることになった。その結果として、「カダザン人」は半島部のマレー人ムスリムやサバの〈海の民〉との対立を招き、さらに〈陸の民〉の中にもカダザン人アイデンティティへの疑問を抱かせることになった。

1963年のマレーシア結成を通じた独立の際にカダザン人政党は党首を州首相にすることに成功し、さらにマレーシア参加の条件としてマレー語の国語化やイスラム教の国教化をサバには適用しないことを認めさせた。しかし、このカダザン人政党には〈海の民〉を含めたサバの人々の統合を実現することができず、1967年の総選挙を契機に解散し、これ以後カダザン・ナショナリズムはサバの政治の表舞台から姿をしばらく消すことになる。

(2)1980年代のサバ人ナショナリズムとカダザ

ンドゥスン人アイデンティティ

1967年にカダザン人政党が解散すると、〈陸の民〉のうちある者はドゥスン人を名乗り、ある者はイスラム教に改宗して、〈海の民〉とともにサバ州の運営の一翼を担った。しかし、1980年代に入ると経済開発の恩恵がサバの人々に十分に行き渡っていないとの批判が強まり、サバにマレーシアの一州として適切な待遇を与えるよう求める動きが登場した。

この動きの中心となったのは、内陸部のタンブナン地方出身の〈陸の民〉たちだった。タンブナンには早くからキリスト教の宣教師が入っていたためにキリスト教徒が多いが、プナンパンのように英語が十分に浸透しているわけではなかった。ブルネイ王国との関係は名目上のものに過ぎず、人々はドゥスン人と呼ばれることに抵抗がなかった。

1983年にタンブナン出身者たちがサバ団結党を組織すると、〈陸の民〉や〈海の民〉を含む多くの人々が集結した。彼らは自分たちをサバ人と呼び、サバ人としてのまとまりを強めることでマレーシアにおけるふさわしい扱いを求めようとした。

タンブナン出身者たちは、サバ人の地位向上とあわせて〈陸の民〉の地位向上もはかろうとした。しかし、〈陸の民〉のアイデンティティの再編を求めたタンブナン出身者の試みは、結果としてサバ人のまとまりを弱めることになった。

タンブナン出身者は、独立以来「カダザン人」とされてきた〈陸の民〉の民族名を1989年に公式に「カダザンドゥスン人」に変更した。2つの呼び名を並べただけだが、日常生活ではカダザン人とドゥスン人のどちらも使えることになり、〈陸の民〉の再統合をもたらした。

【映画に見るマレーシア】サバの地元映画に見る民族・宗教と国籍(山本博之)

しかし、〈陸の民〉の統合の試みは、結果として〈海の民〉との統合を弱めることになった。タンブナン出身者の多くがキリスト教徒だったことから、彼らがカダザンドゥスン人アイデンティティを強調すると、半島部のマレー人ムスリムや〈海の民〉がムスリムの排斥であると受け止めたためである。

サバの政治指導者たちがサバ人の権利を唱えて連邦政府と対立すると、半島部のマレー人政党である UMNO が 1991 年にサバに進出した。これに伴いサバの〈海の民〉はサバ団結党を離れて UMNO に合流した。こうして、サバ人を民族的主体に準ずるものにしようとするタンブナン出身者の試みは実を結ばなかった。

(3) スンガイ人による「オラン・キタ」

アブバカル・エラは、1959 年 8 月 31 日に内陸部のキナバタンガン郡ピナンガで生まれた。民族性はカダザンドゥスン系のスンガイ人である。サンダカンの学校で学び、1978 年にサンダカン市の職員になった。1981 年にコタキナバルに出て市政局で職を得たが、副業でナイトクラブの歌手を 1993 年まで続けた。1986 年 2 月に同じ村出身のアキシヤ・アブドゥッラー（フロラ・フランシス）と結婚している。

スンガイ人とは、伝統的にキナバタンガン川などのサバ東海岸を流れる川の流域に住む人々であり、言語上の分類ではカダザンドゥスン系に属するが、多くはイスラム教を受け入れている。本稿ではこれまでアンパルやアンコンなどの〈海の民〉を非イスラム教徒として紹介してきたが、それを演じているアブバカル・エラ自身はイスラム教徒である。

これにより、アブバカル・エラ作品で〈陸の

民〉の宗教が明確でないことも理解できるだろう。キリスト教徒が多数を占めるプナンパン出身者やタンブナン出身者と異なり、イスラム教が広く受け入れられているスンガイ人にとって、〈陸の民〉を強調することはムスリム性の否定につながらない。「スンガイ人」(川の人)という呼び名が示しているように、スンガイ人は〈陸の民〉と〈海の民〉を媒介しうる立場にある。その意味では、スンガイ人は〈陸の民〉と〈海の民〉という二分法を解体する契機を内包した存在であるとも言えるだろう。

アブバカル・エラにとって、カダザン人やカダザンドゥスン人という標識はもはや重要ではない。サバ(マレーシア)の国民か不法滞在者かは区別されるが、サバ人であるかないかは重要ではない。ここで意味がある枠組みは「サバという場で暮らしを営むことが適切に認められた人々」である。「オラン・キタ」とはこのことにほかならない。

これまでにアブバカル・エラによる政党結成の動きはないが、2004 年の州議会選挙ではアブバカル・エラが無所属で立候補し、落選している。与党候補への対立候補となったことが政権への挑戦と受け止められたためか、選挙後はテレビでアブバカル・エラの姿が見られない時期がしばらくあったようだが、テレムービーの制作はその後も続けている。

アブバカル・エラの試みを 1950 年代のカダザン・ナショナリズムや 1980 年代のサバ人ナショナリズムと同列に扱ってよいかはさらに検討が必要だが、〈陸の民〉による「われわれ」の捉え方の発展過程として見ると興味深い。今後もアブバカル・エラ作品や他のテレムービーの発展を見守っていききたい。